

よそ半年近くたった平成四年九月十六日であった。

自由に書いて下さいとの編集室からの依頼に甘えて、名古屋大学史編集委員長のころの特に強く印象に残っている出来事的一端を思いだすままここに述べた。くしくも述べた二つのことはいずれも専任編集室員増員のための全学欠員流用についての話になってしまったが、このことを思い出す度毎に故早川前学長の名古屋大学史編纂事業への温かいご理解とご配慮が身に沁みてありがたく感ぜられるのである。それとともに、学長の配慮や意図が実現するには、その結果まで注意深く観察して確認することが大事であることも学ぶことができた。この経験が総長就任後の日々の仕事に大きな教訓となっている。

(名古屋大学総長)

「大学史」の光と影

副編集委員長 三 鬼 清一郎

当事者がみずからの過去を語ることは、たやすいようで意外とむづかしい。他人には知られたくないこともあるから、無意識のうちにそれを美化したり、厚化粧をほどこす場合もある。「大学史」もその例に漏れないであろう。この企画が具体化されはじめた頃には、何を明かにすることができれば、真の「名古屋大学史」たりうるかを考えていた。半世紀ほど以前に、戦争遂行に必要とされる技術者の育成を目的として、帝国大学という名を冠して出発し、戦後民主主義の潮流のなかで総合大学に脱皮したという経緯は、今日にもさまざまな形で影をおとしているよ

うに思われる。それを直視することがなければ、これからも地域に根ざした大学として発展していくことは困難であろう。

大学史の編纂には、最初からかわることになった。「部局史」は、企画の段階から執筆のスタイルにいたる迄、それぞれの学部や研究所などの性格を浮かび上がらせる結果となったように思われる。画一的な編集方針をとらなかったことが、よかったのかもしれない。それぞれの部局が抱えている問題が、行間に滲み出ているとも言えるであろう。文学部の場合、特定のテーマについて、どの程度まで踏みこんだ叙述ができるかについての討議を重ねたが、種々の事情から中途半端なものとなってしまった。

「通史編」では、一九七〇年代に全国的なひろがりを見せ、大きな関心をあつめた「大学紛争」を分担することになった。気の重くなるテーマであるが、当時の記憶をたどりながら史料を集めた。東大の大学史編集室には、その時期のビラ一枚に至るまで、ていねいに保存されているのは驚かされたが、ある意味では、これが当然のことであろう。刊行された他大学史を読むとき、どうしてもこの時期の記述が先に目に入ってしまふ。大学ごとに、叙述のスタンスに大きな開きのあることが確認できた。

名大の場合、問題の発端となったのは、評議会が出した「四・二八声明・見解」である。当初から賛否両論が激しくたたかわされたことは、私にとっては、着任して一ヶ月もたたないときの出来事だけに、鮮明な印象として残っている。この問題に軽々しい判断を下すことは差し控えるべきであり、「大学史」がそのような場でないことは当然であるが、少くともこの声明などが、どのような経過で成立したかを確定することは必要であると考えた。叙述した内容については、読まれた方々の御批判を待つほかはないが、私としては、このような場面で大学人として、とりわけ、大学の管理・運営に直接にたずさわる立場にいる場合、何をなすべきであり、何をすべきではないかを、

自分なりに考えてみたかったのである。

編纂の過程では色々な思い出があるが、一つだけ書いておきたい。それは、この「大学史」が元号表記をとっていることについてである。事務局が作成した原案は、西暦表記を基本とし、必要に応じて元号をつけるというものであった。しかし、会議の席上、ある委員から、「西暦で〇〇年度とすると、アメリカなどの会計年度との違いが出てくる」という「高説」が開陳されたため、思わぬ結果となってしまった。あえて評価はまじえず、事実のみを記しておきたい。

完成された「大学史」を手にするとき、これまで実務を担当しながら執筆にあたられた助手の方々や嘱託職員の方々の御努力に、ただ感謝するばかりである。ときには深夜まで黙々と作業にあたられ、いまは本学を離れてそれぞれの場で活躍されている方々に報いるためにも、この四月から衣更えして「資料室」として再出発することになったから、名古屋大学が日本の近代史のなかで、どのような役割を果して来たかという面に光をあてていくことが必要となるであろう。

(文学部教授)

法学部の色

編集委員 神保文夫

どの大学にもスクール・カラーがある。学風ないし伝統(School Tradition)という意味での名古屋大学のそれは